

まえがき——本書の7つの特長と活用方法

教育実習——それは、教育職員免許取得をめざす学生のみなさん全員に共通する、最大の山場といっても過言ではありません。ただ、そこに到達すべく辿っていく道筋そして歩き方は、ある部分は共有でき、ある部分は一人ひとり違います。本書は、こうした共通する部分と相違する部分の両方をふまえて、みなさんが教育実習でベストをつくすためには、どのような心構え・準備が必要か、準備のコツは何かをお伝えします。そのため、本書は以下7つの特長をもっています。

①所属する大学・学部の特長／弱みをふまえたアドバイス

教育実習という山場の迎え方は、みなさんが教員養成大学・学部・に在籍しているか、それとも、(たとえば)文学や工学といった専門分野を学ぶ一般大学・学部・に在籍しているかによって、だいぶ異なります。

教員養成大学・学部の学生は、入学年次から教育諸科学(たとえば教育心理学や学校経営学)の授業が専門科目としてあり、教え方を学ぶ授業や学校訪問・授業見学が下級年次にも配置され、教育実習も3年次と4年次で2回実施されるなど、「先生になる」ことに焦点を当てたカリキュラムが組織されています。

これに対して文学や工学といった専門分野を学ぶ学部の学生は、それぞれの学問の専門性が身につくように意図されたカリキュラムのもとに学びます。その学びは、たとえば哲学科なら「1795年に著されたカント『恒久平和のために』の現代的意義は何か」といった具合です。こうした専門性の学びにエネルギーを注ぐ分、授業での教え方の練習といった、より実践的な授業は、3年生になって初めて配当されたり、あるいは、教育実習直前の1日から数日程度の

講習会のみだったりします。

教員養成大学・学部と一般大学・学部、それぞれに強み／弱みがあります。強みは弱みに転じ、弱みは強みに転じます。教員養成大学・学部の学生なら、「実習で倫理の授業をやることになった。学習指導案はきちんと書けるし、高校生とのコミュニケーションにも慣れているけれど、なんだか内容が薄い気がする。哲学科の学生みたいに深く説明できる自信がない……」。文学部哲学科の学生なら、「平和の実現方法について哲学者たちのあいだに意見の対立があって、おもしろいけど難しい。どうしたら高校2年生にわかりやすく伝えられるのかなあ？」。

本書は、一般大学・学部の学生、あるいは教員養成大学・学部の学生が抱くこうした悩み・不安に対して、「こんなふうに準備をしておけば大丈夫だよ」と、ズバリお答えします（とくに第4～8章）。

② 3段階のレベル設定——ホップ→ステップ→ジャンプ

「こんなふうに準備をしておけば大丈夫だよ」とは、どんなふうに、でしょう。それは、自分のレベルを見極めて、いまは何をクリアすべきか、それができたら次の達成課題は何かということを、明確にとらえて一步一步進んでいくことです。これは、どの学部 に在籍していても共通です。

本書は、いたるところで3段階のレベルを設定し、やるべきことを説明しています。たとえば第5～6章を読むと、「自分は、『レベル1：教科書の知識をなぞって並べた学習指導案』だな。なるほど、こういうところが足りなかったんだ」「自分は『レベル3：知識のもう一歩奥で発見をさせる学習指導案』を書こうとしているんだけど、まだ充分にコツがつかめていない段階だな」といった気づきがあるでしょう。

また本書は、昨今の世界的潮流として学校現場に求められているアクティブ・ラーニングの実践についても、レベルを3段階に分けて説明しています（第8章）。

③ ICT 機器をフル活用——自分の映像見て授業方法を直せ

近年、ICT（information and communication technology）機器を活用した授業、

ということが強調されています。たとえば、地理の時間に Google Earth を使ってバーチャル旅行を体験する、理科の時間にガスバーナーの点火方法を映像で教授する、英語の時間に錦織選手の英語スピーチを見せ、セリフの一部を空欄にしたパワーポイントを提示して考えさせる……などなど。授業者がコントロールできる、動きのある視聴覚教材は、上手に使うことができれば、生徒たちの興味関心を喚起し、それを持続させるでしょう。

しかし、ICT 機器が効果を発揮するのは、みなさんが展開する（であろう）授業だけに限りません。みなさん自身の授業を録画し、あとで再生しながら振り返るのも、大変効果的な腕の磨き方です。「私の声、小さいしメリハリがなくて聴き取りにくい」「あれ、僕の机間巡視、同じ列ばかり歩いているし、後ろの生徒までは充分とどいていない」「廊下側の一番前の生徒との質疑応答にかかりっきりになっていて、窓側の後ろの二人がおもしろそうなことを言っているのに全然気がつかなかった！」といった発見がたくさんあるでしょう。「人の振り見て我が振り直せ」ならぬ「自分の映像見て我が振り直せ」です。

本書の第 7 章では、授業における ICT 機器活用のポイントに加えて、自分の授業力を向上させるために、どんなふうにして映像をふり返れば効果的かを説明します。

④大学生の「常識」は大人の世界では非常識——まずはその認識から

みなさんは小中高大と、すでに十年以上も教育機関とつき合って過ごしてきたので（不登校などの期間も含みます）、「学校というのはこんなところ」「先生というのはこんな感じ」と理解していると思っていますでしょう。でもそれは、生徒・学生として見えた世界でしかありません。学校・大学という組織を円滑に機能させていくために、みなさんの知らないところで、さまざまな立場の大人たちが、教育職員免許法や学校組織・大学組織の制度・ルールに基づき、協力し合って骨折り仕事をこなしています（第 1 章）。

つまり大人たちは、人様にムダな労力をかけさせない・人様を待たせない・気を揉ませないための配慮を払い続けています。みなさんは、大学教員のみならず、教職課程の事務職員の方々、実習先の先生方に対して、こうした配慮をしていますか。背後にある法律や制度やルールがどんなものを想像しながら、

提出物や連絡などの締め切りを厳守して対応していますか。これらの大前提となる規則正しい生活ができていますか。

「一日くらいなら提出が遅れても大丈夫だろう」。相手が友だちならいいかもしれませんが、大人の世界では許されません。提出を待つあいだ、事務職員の仕事は完成せず、まとめた書類を提出する先の人に謝らなくてはなりません。教職課程、教育実習というものは、一つの大きな法律・制度・ルールの下で動いているのです。このことを肝に銘じて、大人としてふるまってください。

そのためには、心構えだけではなく、生活力・段取り力・計画性の有無が問われます。第2章は、教育実習に行くのに(=社会人として)ふさわしい生活力があるかどうかについても、3段階のレベルを設定しています(「それでは教育実習に行く資格はない!」という「レベル0」を入れれば4段階ですが)。自分はどうなのか、チェックしてください。

⑤教育実習評価規準の厳しさを知る——そうすれば訓練法がわかる

教育実習に行くのに(=社会人として)ふさわしい生活力。学習指導案を作成し授業を実践する力。これら2つが、しかるべきレベルに達していることが、教育実習に行くまでに求められますし、実習先では、これらをさらに伸ばせるかを問われます。「問われる」とは、より正確に言えば、「評価される」ということです。教育職員免許法に則った教育行政のもとで、各実習校は、教育実習生を日々、細かく評価して成績をつけます。

第3章は、教育実習の評価規準・評価項目はどのようなものか、それにもとづき、指導教員と実習生とのあいだには、どのような指導のやり取りがなされ評価されるのかを、具体的に見ていきます。本章を読めば、なぜ・どのように、教育実習に行くのに(=社会人として)ふさわしい生活力と、学習指導案を作成し授業を実践する力とが不可欠なのか、理解がぐっと深まるでしょう。

⑥自分の認知タイプを理解する——そうすれば対処できる

教育実習の力量を一步一步向上させていくコツは何でしょうか。この点に関して、自分が生まれつきもっている「認知のタイプ」をふまえてアドバイスしていることも、類書にはない、本書の特長です(第2章)。

「認知のタイプ」とは、たとえば「刺激に対する反応が早すぎるタイプ」「先のことを想像することが苦手なタイプ」「筆跡がどうしようもなく下手なタイプ」などです。早いとか下手といっても、自分にとっては自然なので、心当たりや自覚がないかもしれません。ですから第2章は、まずは「自分はそうだ(そうかも)」と気づくきっかけを提示します。

ただ、そうした心当たりや自覚があったとしても、生まれつきの傾向なので、変えていくことは必ずしも容易ではありません。そこで続いて、効果的なタイプ別の対処方法やトレーニング方法を紹介します。

⑦理想と異なる現実に立腹しない——教師としてのキャリア形成を視野に入れて実力を磨く

教壇に初めて立ってみると、「対話式の授業をやっていたら範囲が終わらない」「指導教員が暗記型・知識注入型授業をする先生で、せっかく作ったアクティブ・ラーニング型の学習指導案を全否定された」といったことを経験するでしょう。すると「大学で学んだことって、なんか、すごい『理想』なんじゃない？」と疑問を感じる人は少なくないのではないのでしょうか。

「理想」とは何でしょう。理想とは、そこから現実がどれくらい離れているのかを見極める規準であり、現実をよりよく理解する手だてです。「本当は〇〇ができれば理想なんだけど、現実はその50%くらいかな」といったとらえ方ができれば、ではどうすればあるべき方向へと改善していけるかがわかります。現実を照らし出す規準がなければ、その場その場をしのいで終わりです。あるべき方向を見失わず、柔軟に現実に合わせて授業をしていくという点で、理想は大いに役立つのです。

柔軟性のない教育実習生は、自分を守ろうとするあまり理想だけにかじりついてしまうので、組織として動いている学校では組織の論理が優先されること、他者である生徒は教師の思いどおりにはならないことを、なかなか理解できません。さまざまなことを「自分大事」に考えたり、自分の経験を当てはめてわかった気になったりして、ふるまってしまいます。

では、どうすればよいのでしょうか。第9章は、教師としての長いキャリアを築いていくことを視野に入れ、教育学や社会学の理論も援用しながら、説

明していきます。また第9章は、ハラスメント問題についても、その重要性に鑑みて、相当の紙幅を割いています。

以上、本書の7つの特長について、主にどの章で述べられているかにふれながら説明しました。本書は、どの章からでも読んでいけます。いま一番気になっているところから始めてもよいですし、第1章から順に進んでいくのもよいでしょう。本書を熟読し、良い試行錯誤を繰り返し、教育実習でベストをつくしてください。

2017年7月

編者を代表して
筒井美紀

著者紹介

〈〉内は担当章。

筒井 美紀（つつい みき）

〈第3・4・5・6章〉

法政大学キャリアデザイン学部教授

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学，博士（教育学）。

主要著作：『教育を原理する——自己にたち返る学び』（共著）法政大学出版社，2013年。『殻を突き破るキャリアデザイン——就活・将来の思い込みを解いて自由に生きる』有斐閣，2016年。

遠藤 野ゆり（えんどう のゆり）

〈第2・7・8章〉

法政大学キャリアデザイン学部准教授

東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。

主要著作：『虐待された子どもたちの自立——現象学からみた思春期の意識』東京大学出版会，2009年。『あたりまえを疑え！——臨床教育学入門』（共著）新曜社，2014年。

寺崎 里水（てらさき さとみ）

〈第9章〉

法政大学キャリアデザイン学部准教授

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程中退。

主要著作：『大学生になってどうということ？——学習・生活・キャリア形成』（共著）大月書店，2014年。『教職概論——先生になるということとその学び〔改訂版〕』（共著）協同出版，2017年。

佐藤 仁（さとう ひとし）

〈第1章〉

福岡大学人文学部准教授

広島大学大学院教育学研究科博士後期課程修了，博士（教育学）。

主要著作：『現代米国における教員養成評価制度の研究——アクレディテーションの展開過程』多賀出版，2012年。『教職概論——先生になるということとその学び〔改訂版〕』（共著）協同出版，2017年。

第 I 部 教育実習に臨むための準備

第1章 教育実習の制度的側面 3 ——法律・大学・学校の論理

- 1 教育実習で期待される学び 3
相当免許主義——免許の意味を確認しよう 4 大学における教員養成と開放制——一般大学・学部における教職課程の意味とは？ 5 教育実習の目的とは？ 6 教職への適性や進路を考える 7 教科指導を中心とした実践的指導力を伸ばす 8
- 2 教育実習生を送り出す大学の論理 9
大学の責任——「公害」とならない、ふさわしい学生を判断する 9 教育実習の履修要件の意味——教育実習生として送り出すのにふさわしい学生像 11 計画的な履修ができていないこと 12 教科教育法の履修が意味すること 13 社会人としての常識的姿勢をみる——ガイダンスへの出席 14
- 3 教育実習生を受け入れる学校の論理 14
教育実習生の受け入れ手続き——教育委員会の思い 15 教育実習生の受け入れ方針——地元出身者、地元教員採用試験受験予定者を受け入れる意味 17 就職活動と教育実習の両立？——今後の動き 18

第2章 教師の資質とは何か 21 ——教育実習に行くまでのトレーニング

- 1 教育実習生の一日と実習先教員の生活 21
実習生の一日 21 時間に関するルールや指示 23 学校の先生の一日常 24 実習生の指導はいつできるか 25
- 2 先生らしくふるまうべきこと 26
「先生」と呼ばれること 26 教育実習に行く前にできなくてはならないこと 27 事前のトレーニングが不可欠 28
- 3 ケースに学ぼう——大学生のNG行動 30
就活との同時並行はNG 30 「バックレる」大学生 31 夢をかなえたいから 32 大学生の常識は大人の非常識？ 33 マナー編 34 手続き編 35

4	教育実習に行く前に必要な 2 種類の自己分析	37
	自分の現在のレベル	37
	自分の認知のタイプ	38
	注意が散漫になりやすいタイプ	39
	衝動的なタイプ	39
	先のことを想像することが苦手なタイプ	40
	言葉を文字どおり受け止めてしまうタイプ	40
	情報の処理や記憶が苦手なタイプ	40
	読みにくい字しか書けないタイプ	41
5	はつらつとした人になる——まとめにかえて	42
第 3 章	「教職専門性」の基礎を問われる実習生	43
	——プロは厳しく評価する	
1	指導教員はどこを見ているか	43
	F さんの実習日誌への G 先生の書き込み	43
	教職専門性が必要だ	48
2	教育実習生を評価する制度的枠組み	49
	教育実習成績報告書	49
	教育実習生の評価方法——教育委員会の指導・助言のもとに	50
3	統計データから見る実習生の弱点	52
	実習生の弱点をデータで確認	52
	評価の分布——総合評価は個別項目評価より「甘口」	54
	「教科指導の技術」を左右するもの——「教材研究」と「事務能力」	56
4	本章のまとめ——甘い気持ちでは歯が立たない	57

第 II 部 学習指導案の作成と授業展開の技術

第 4 章	学習指導案の基本	61
	——「ボタンの掛け違い」に気づく	
1	学習指導案の構成と作成のポイント	61
	学習指導案の 4 パーツ	61
	単元計画	61
	毎時の授業展開	64
	セリフバージョン	65
	板書内容や配布プリント	66
	まとめ——郷に入っては郷に従え	66
2	学習指導案を書くときの 7 つの勘違い	67
	ウォーミングアップ——「良い試行錯誤」のために	67
	学習指導案は他者に読んでいただくものでもある——エゴセントリックに書かない	68
	指導案は一筆書きでは書けない——それは作詞作曲に似ている	72
	「主体的参加」「興味の喚起」「理解の促進」——抽象概念でごまかさない	72
	資料を活用すれ	

- ば良いわけではない——読ませ考えさせる時間がかかる 73 教師の発問——
 んのため？ 74 生徒は「想定内」で返してこない——「想定外」を想像しよ
 う 7 5
 知識のもう一步奥で何を発見させたいの？——揺さぶる授業が教養を育む 76
- 3 「ダメ指導案」にツッコミを入れてみよう 78
 模範的指導案を眺めていても…… 78 さあ、学習指導案を作ってみよう 78

第5章 学習指導案の3段階目標 79 ——自分の実力に合わせて

- 1 レベル1：教科書の知識をなぞって並べた指導案 79
 時間どおりに終わりそうである 80 発問の内容と意図とが明確である 81
 生徒の作業・動作が明確である 82
- 2 レベル2：知識を飲み込みやすく整理した指導案 83
 生徒との対話のなかで授業が進められる 83 生徒の興味をググッと引き寄せ
 る工夫がある 87
- 3 レベル3：知識のもう一步奥で発見をさせる指導案 88
 生徒の思考を適切に流れさせている 88 「ここを頭に残してほしい」という
 メッセージがある 89

第6章 学習指導案のレベル・アップ 93 ——ちょっとしたコツを見逃さない

- 1 知識のもう一步奥で発見をさせる工夫 93
 セリフバージョン 95 展開Ⅰ：元寇（モンゴルの襲来）（10分） 97 展開
 Ⅱ：元寇（モンゴルの襲来）の社会的影響（18分） 102 まとめ（7分） 104
- 2 説明と発問は正確かつ具体的に 104
 専門事典をチェックしよう 104 具体的な概念・図・イラストで言い換えよ
 う 105 ひと手間加えてクイズにしよう 107
- 3 資料は「読ませる」のではなく「読み解き方を教える」 109
- 4 事実の羅列を「謎解き物語」に 112
 教科書はたいがい無味乾燥に感じる 112 「謎解き物語」がひらめくには 113
- 5 資料しか使わない先生の名人芸 114

第Ⅲ部 教職専門性の総合的なブラッシュアップ

第7章 学習指導案とリハーサル・模擬授業の往復 119

——良い試行錯誤とは

- 1 リハーサルはなんのため? 119
現実化することによってわかる 119 一人リハーサルはなんのため? 120
人前リハーサルはなんのため? 122 模擬授業はなんのため? 124
- 2 ICT 機器を使った振り返り 127
- 3 授業分析のポイント 128
授業の仕掛けは生徒の学びに活かされているか? 129 ICT 機器の特性を利用できているか? 129 「質問」は「発問」になっているか? 131 「言葉のやり取り」は「対話」になっているか? 132
- 4 より良い試行錯誤に向けて 133
できること／できないこと 133 リハーサルによる触発 134

第8章 アクティブ・ラーニングの基本と実践 137

——生き生きした思考の活動に向けて

- 1 アクティブ・ラーニングとは何か 137
- 2 アクティブ・ラーニング視点の教育手法 139
アクティブ・ラーニングの目的①——授業内容に即して 139 アクティブ・ラーニングの目的②——生徒の能力に即して 141 アクティブ・ラーニングの具体的手法 142
- 3 アクティブ・ラーニング実施の留意点 142
時間のコストを考えて取捨選択を 142 作業の「補助線」の重要性 145
作業の評価の難しさ 146 教育実習生としての留意点 147
- 4 アクティブ・ラーニングの3レベル 148

第9章 学校・生徒の実態と実習の課題 151

——教師として成長するために

- 1 多層的で予測不可能な仕事に対応する 151
——柔軟さ・臨機応変さが試される
予想外に対応する 151 成長のチャンスと向き合う 153

2	伝わらない悲しみに向き合う——そこに工夫の喜びがある	155
	教育者の意図のとおりに学んでくれるとは限らない	155
	「俺の話を聞け」という怠惰	156
3	学校という場を多角的にとらえる——青少年の居場所という意味	159
	居場所をつくる	159
	学校という場の役割を考える	161
4	被害者にも加害者にもならないために	163
	——よりよい教師キャリアの構築にむけて	
5	本章のまとめ	167
	文 献	170
	あとがき	171
	索 引	176

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

第 I 部 教育実習に臨むための準備

教育実習に臨むにあたって実習生が準備しなければならないことは、たくさんあります。その本筋は、「授業力を鍛えておくこと」です。授業力を鍛えるためには、より良い指導案を作れるようになり、練習を繰り返してその授業をより良く実施できるためのスキルを身につけるようになることが大切です（第Ⅱ～Ⅲ部）。けれどもそうした授業そのものの準備の前に、第Ⅰ部では、実習とはいったいどのような目的のもと、どのように位置づけられているのか、どのような心構えが必要なのかを確認しておきたいと思います。それは簡単に言うと、「一人の大人として制度を理解し、態度と準備を整える」ということです。

まず第1章では、教職課程やその中の教育実習がどのような法律や制度に基づいているのかを確認します。これまでみなさんは、何かを学ぶときに、その学びの制度的側面をきちんと確認したことがあるでしょうか。これをしておかないと、「指示どおりに書類を提出する」「言われたから指導案を書く」といった、指示待ち人間になりかねません。教職は、教師が自ら教材を研究し、その成果を生徒に伝える方法を探求する、創意工夫を要する仕事。だとしたら、自分の出す書類の背景、作成する指導案の背景となる制度をきちんと把握し、こうした事柄に主体的に関われるようになりましょう。

続いて第2章では、教育実習に臨む際に求められる姿勢を確認します。ここで主として取り扱うのは、実習生の生活面や態度面、手続き面です。本書はこの章以降は、主として教科指導に焦点を当てていきます。なぜなら、教育実習生に求められるのは何よりも、教科指導

の力だからです。ですから第2章は、実習生の生活面について述べることのできる最後の章になります。特に、実習校の指導教員との関係の取り方や、大学生が「常識」と誤解してしまっている非常識を確認します。この確認をとおして、「大人として振る舞うこと」とはどのようなことかを具体化します。

最後に第3章では、教育実習は何をどのように評価されるのかを、データに基づいて分析します。すると、実習生に最も求められているのは、授業力であることがわかります。と同時に、簡単なデータを読み取る力を、みなさんにつけてもらいたい、とも考えています。理系の難しい統計学をやろうというわけではありません。授業を改善していくために、客観的な数量データに基づいた最低限の分析をできること。これは、社会人としてぜひ身につけてほしい技能です。

まえがきでも述べたように、教育実習に臨もうとしているみなさんの現状（心構えや準備の度合い、授業力や事務能力などなど）は、各自でかなり違っている面があります。より良い準備をして臨んでほしいと思いますが、ではどのぐらい改善できるのかという現実的な側面も見据える必要があります。本部では、特に第2章を中心に、「最低限でなければならないこと（レベル1）」や「なるべくできてほしいこと（レベル2）」、「できるととても良いこと（レベル3）」という三段階で、みなさんの取り組むべきことを提示しています。自分は何のぐらいのことができるのか、冷静に分析しながら、読み進めてください。

第2章

教師の資質とは何か ——教育実習に行くまでのトレーニング

第1章で述べたように、それぞれの大学で定められている「教育実習に行く資格」として、「言動、身だしなみ、マナー等で実習校の教育活動を妨げることのない者」（福岡大学）といった項目がしばしば挙げられます。本章では、実習校の教育活動を妨げることのない言動、身だしなみ、マナー等は具体的にどのようなものなのか、そしてそれらはなぜ実習生に求められるのかを見ていきます。

まず、教育実習生が守らなければならないルールや約束がなぜあるのかを、実習生と、実習生を指導する教員の一日がどのようなものかという点から考えます（第1節）。続いて、先生としてふるまうべき事柄を挙げます（第2節）。こうした「ふるまうべき事柄」が守れなかった学生の実例をもとに、実習生が「常識」と思っていることが大人の世界では「非常識」ととられてしまいかねないことを確認し（第3節）、最後に、非常識にならないために自分の「実力」と「認知タイプ」とを判断する方法を述べます（第4節）。

1 教育実習生の一日と実習先教員の生活

実習生の一日

まず教育実習のあいだの生活はどのようなものか、見ておきましょう。これは、中学校で3週間の教育実習をおこなったA君の生活記録です（最終週の土曜日）。

一点補足しておきますと、教育実習生の退勤時刻は、学校の方針によってかなり

表 2-1 A 君の生活スケジュール

時 刻	実習生の日
6:00	起床
6:45	家を出る
7:25	学校に着く 実習生控室で授業準備
8:10	HR クラスで生徒と交流
8:25	指導教員と打ち合わせ
8:30	朝の SHR
8:45	1 時間目 教壇実習
9:45	2 時間目 他の実習生の教壇実習見学
10:45	3 時間目 教壇実習
11:45	4 時間目 指導教諭の授業見学
12:35	昼休み (HR クラスでお弁当)
13:20	5 時間目 他の実習生の授業見学
14:20	6 時間目 控室で指導案の作成
15:10	清掃
15:25	帰りの SHR
16:00	実習日誌記録記入 指導案作成し提出
17:00	部活動に参加
18:00	指導教員からの指導 教具作成, プリント印刷 (控室で夕食)
20:00	学校を出る
20:45	帰宅, 担当科目の勉強
24:00	就寝

まちまちです。実習生がなるべくしっかりと授業準備の時間を取れるよう配慮してくれる学校もあります。一方で、特に近年は、遅い時刻まで学校で作業することを禁止する学校もあります。社会的に長時間労働が問題視されるようになり、とりわけ教師の多忙が注目されるようになるなかで、実習生も休養を十分に取るように指導する学校も増えてきています。

「18時で帰されてしまうけれど自分はもっと準備をしたい」と思う実習生もいるかもしれません。「一生懸命仕事をすることをなぜ妨げるのだ」とか、「なぜ他の実習校なら許可されることが自分の学校では認めてもらえないんだ」と理不尽に感じるかもしれません。けれども、学校によってルールが異なるのは、指導方針の違いだけでなく、学校の警備体制や地域の安全性の違いもあるから

です。実習生の生活を守るためにも、こうした指針は各学校ごとに立てられています。

もしもみなさんが、もっとたくさん時間を取って授業準備をしたいと思うならば、家で作業をするなど、別の方法を探しましょう。なかには生徒のプリントなど準備に必要な資料を自宅に持ち帰ることを禁止している学校もあります。学校でしかできないこと、家でもできることを区別して、効率的に対処するようにしましょう。

時間に関するルールや指示

退勤時刻に限らず、実習生は、**教科指導においても生活面においても、必ずその学校のルールに従わなくてはなりません**。指導教員らからのさまざまな指示も、同様です。たとえば、指導案や実習日誌はいつまでに提出しなくてはならないか。A君は、次のような体験をしました。

実習日誌を必ず帰りの SHR のあと 30 分以内に提出するように言われていたが、SHR 後に生徒が話しかけてくるのですぐに取りかかれず、書く内容も多かったので、30 分で書き上げられなかった。少しでも提出が遅れてしまうと、職員室に持って行っても指導教員はもういなくなっており、すれ違いばかりが続いた。一生懸命書き込んだ日誌にはほとんどコメントがもらえず、毎日「時間どおりに提出しましょう」とだけ書かれてしまった。

教育実習生は、毎日「実習日誌」をつけ、指導教員にチェックしてもらうことになります。これは「日記」ではなく「日誌」ですから、書くのは個人的な感想ではありません。出勤から退勤までの間のこまかい報告に加えて、**実習生として自分が何を経験し、何を感じ、それをこれからどのように活かすのかを、公の記録として書きます**（→第3章）。日誌を書くことは業務の一つですから、きちんと時間どおりに済ませなければなりません。また、日誌は正式な書類なので、ボールペンで書かなければなりません。修正液（テープ）も使えません（間違えたら二重線で消して押印します）。

A君はどうしても指示された時間までに日誌を提出できませんでした。しかしそれは、手書きで文章を書くのに慣れていないというだけでなく、話しかけ

あとがき

本書は、教員養成大学・学部ではない一般大学・学部で、教員免許を取得しようと、教育実習に向かう大学生たちにとって必要な心構え、学習指導案の作成方法、そして授業力など教職の専門性を高める方法を考えてきました。「まえがき」で述べたように、教職に就くための2つの道のり（教員養成大学に在籍するか開放制を利用するか）の違いは、それぞれに、良さと難しさとをはらんでいます。本書では、その難しさを乗り越えながら、良さを生かしていく方法を検討してきました。

本書では、実習にあたっての心構えを、「常識」という観点から述べてきました。これは、実習校から寄せられる次のような要望ゆえです。「常識は、実習では教えられません」。つまり、常識を身につけていない学生はよこさないでほしい。そんなことまで指導しているほど実習校はヒマではない！

実はこうした問題は、一般大学・学部だけでなく、教員養成大学・学部でも生じています。本書に掲載した「NG例」の中には、教員養成大学・学部の教職員のみならずから寄せていただいたケースも含んでいます。しかし考えてみれば、かつて大学生は、「モラトリアム」が許されていました。大人になれないことを、許容されていました。教育実習において、「大人の常識」と「ワカモノの常識」が軋轢を生むのは、はるか昔から、頻繁に起きる当然の出来事だったはずです。

社会全体に余裕がなくなる中で、こうした軋轢を、やり過ごすことができなくなっている。こうした事情に鑑みて、まだまだ時間に余裕があり柔軟に満ちたワカモノたちに、「大人の側の常識」に合わせてもらいたいと思います。「大人の常識」は、形式的でバカバカしいように見えて、実は合理的に成立し

ている，ということは，社会に出ればいずれ気づかないわけにはいかないことです。

また本書では，その大部分を，指導案の作成について述べています。というのも，指導案をきちんと作るということは，一般大学・学部であっても，きちんと学べば十分にできることだからです。と同時に，実習校から届く，大学への問題提起でもあるからです。「指導案ぐらいいは書けるようにしてから，実習生をよこしてください」。教員として，指導力の不足を，実習校の先生方に，そして授業を受けている大学生たちに申し訳なく思うと同時に，これからは，より良い指導案を作る喜びを，本書をつうじてわかしあっていければと思います。

特に本書では，学生たちの実力に合わせて，3段階のレベル設定をいたるところでしてきました。これは，一般大学・学部特有の事情によります。「まえがき」にも述べたように，教員養成大学・学部の学生の多くは，3年生になるころにはすでに，指導案を何度も作り，模擬授業の経験も重ねています。ですから，レベル1の指導案はさらさらと作れ，レベル2の指導案を目指しているのが当然，とされています。

他方，一般大学・学部では，3年生の後期開始時までに，一度しか指導案を作ったことがないとか，指導案を誰かに添削してもらったことがない，といった残念な事態も，一部では見られます。大学によっては，何百人という教職課程履修生を数人の教員が指導していますから，これは制度上の問題でもあります。その結果，3年生後期の時点で，指導案のどの項目に何を書くのかから説明しなくてはなりません。つまり，レベル1の指導案さえ，まだ書けない学生がいるのです。

と同時に，自分の大学での専攻学問を活かし，高い意欲と教材への深い理解をもって，なんとかレベル2を，いやさらにはレベル3の指導案を書きたい，ともがいている学生がいるのも，事実です。こうした多様な学生たちの指導のためには，学生個々の現状の把握と，これからどこまで到達できるかという目標設定が不可欠です。そのために，レベルを明確に分けることにしました。自分のレベルに合わせて読んでいただければ，と思います。

とりわけ本書では，教科に関して専門的な研究をしている学生だからこそ目

指してほしい、レベル3の授業について述べています。レベル3は、高い教材研究力と生徒理解力がなければ到達できないものです。教員養成大学・学部は、この高みを目指しています。ただし、そこに到達しようとする道筋は、おそらく養成課程の違いによって異なってくるでしょう。一般大学・学部で学ぶみなさんには、自分の学部で学んだ専門性をいかに発揮する道筋を、楽しんでもらいたいと思います。

ただし、注意も必要です。レベル3という高みは、大学生が小手先で習得できるようなものではありません。また、レベル1、2をすっ飛ばしてできることでもありません。実際、レベル1を十分に練習しないままレベル3だけを目指して、実習先で、「教科書の内容一つ教えられないのか」と厳しく指導された実習生もいます。何事も、自分の実力をしっかり見据え、ホップ→ステップ→ジャンプが必要なのです。

レベルのかなり異なる学生が一堂に会して教職を学ぶこと。これは、教員としては正直なところ、指導しにくいものです。ですが同時に、実はこのような多様性もまた、一般大学・学部で学ぶ学生たちの強みでもあります。そう思うのは、教員養成学部（いわゆる国立大学教育学部）と、一般大学での教員養成課程と、その両方で教員を務めた筆者自身の経験によります。両方の場を経験したうえで筆者が感じるのは、一般大学・学部にいるなかで学生たちが出会う多様性は、単なるレベルの違いだけではなく、さまざまな価値観でもある、ということの強みです。

たとえば、「イジメがあったとかセンセイとどうしても合わないとか、そういう理由があるなら仕方がないけれど、特に理由もなく面倒だから学校に行かないという『不登校』は良くない」。こういう意見に対して、教育学部の教員養成課程の学生たちは、約8割が賛同するのに対し、教員養成とは関係ない、一般の教育学の授業では、賛同するのは半分にも満たません。

「学校とはよほどの事情がないかぎり当然行くことが望ましい」。教員養成学部の学生たちの多くがこうした価値観を共有しているのに対し、一般の学生たちは、「まあ行った方がいいと思うけど、行かなくて損するのは本人なんだから自己責任じゃない?」「義務教育って、親の義務でしょ。子供にとっては、権利なんだから、履行するもしないも、本人の自由」といった意見ももってい

ます。

どちらの意見が良いというわけではありません。ただ、教員養成大学・学部
の学生たちは、同じように教職を目指し同じように教科指導技術も生徒理解力
も高めようとする集団の「同質性」（その多くは、共に励まし合って切磋琢磨する
ことのできるすばらしさであるけれども）ゆえに、「価値観の偏り」、そして「偏っ
ているということに気づきにくい環境」にも陥りやすいものです。他方一般大
学・学部では、教職課程を履修する学生自身の価値観も多様であったり、学生
生活で出会いぶつかる他の友人たちの価値観も多様です。この多様さにぶつ
かったタフさ。これこそが、一般大学・学部で学ぶ学生たちの強みになりうる
ものです。

ですから、一般大学・学部で学ぶみなさん、多様性に満ちたこの環境で、人
とぶつかり、自分とぶつかってください。たくさんの人たちとのぶつかり合い、
そしてその中での挫折を通して「強みになりうる」多様性を、「強み」そのも
のに変えてください。たくさん準備をする中で自分の能力の不足を知り、そ
の不安を大切にして実習に臨んでください。自分とは違う意見をもつ人と接す
ることは、怖いことです。自分のレベルを知ることは、おそろしいことです。
けれどもこうした不安は、そのようにして自分とたたかい、教材と格闘してき
た果てだからこそようやく手に入れられる、みなさん一人ひとりの努力と誠実
さの証なのです。

本書の執筆にあたっては、教員養成にまつわるさまざまなエピソードを、た
くさんの大学の教職員のみなさまからお寄せいただきました。「恥ずかしいの
で大学名は出さないでください」ということですので、ここでは大学名、およ
び個人名は伏せさせていただきますが、心よりお礼申し上げます。また、教育
実習生の一〇日、および教員の一〇日については、神奈川県の中学校で教鞭をとら
れている柳沢優太先生に監修をしていただきました。お忙しい中のご指導、あ
りがとうございました。

教師になること。教師であり続けること。教師としてのキャリアデザインは、
他のあらゆる人生と同じように、奥深く、不安と喜びに満ち溢れた多様な可能

性をもっています。その可能性のより良い実現に向けて、できる限りの準備をして教育実習に臨む。ベストをつくし、自分（その限界、その可能性）を知る。読者のみなさんと共に、その小さな一歩を、本書で歩めれば、幸いです。

2017 年 7 月

編者を代表して
遠藤 野ゆり

編者紹介

筒井 美紀 (つつい みき)

法政大学キャリアデザイン学部教授

遠藤 野ゆり (えんどう のゆり)

法政大学キャリアデザイン学部准教授

ベストをつくる教育実習

——強みを活かし実力を伸ばす

DO YOUR BEST!: Introduction to Practice Teaching

2017年9月20日 初版第1刷発行



編 者	筒 井 美 紀 遠 藤 野 ゆ り
発 行 者	江 草 貞 治
発 行 所	株式 有 斐 閣 会社

郵便番号 101-0051
東京都千代田区神田神保町 2-17
電話 (03) 3264-1315 [編集]
(03) 3265-6811 [営業]
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・萩原印刷株式会社／製本・牧製本印刷株式会社

©2017, Miki Tsutsui, Noyuri Endo. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-17432-0

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。